町史とっておきの話 288

只見　ぜんめえ物語③

―ぜんまい栽培―

鈴木（すずき）　克彦（かつひこ）

入叶津の茅屋根職人・佐藤恒雄さん（昭和十年生）は、三〇代から妻のトキエさんとともに約三〇年間連続で泊まり山を続けてきました。入叶津の誰もが一目置くぜんまい採り名人です。また、只見町でぜんまいを山から畑に降ろした先駆（さきが）けでもあります。今回はそんな恒雄さんのぜんまい栽培のエピソードを紹介します。

四〇歳を超えた頃（昭和五〇年代）、新潟県小出のぜんまい仲買人「星元」の主人のアドバイスでぜんまい栽培を試みました。当時、星元は四国地方（中でも祖谷（いや））から大量に栽培ぜんまいを仕入れていたので、恒雄さんにもそんな話を持ち掛けてきたのです。

最初は、庭木を植える感覚で山からぜんまいのカブツ（株）を五つほど自宅近くの畑の隅に植えてみました。すると、翌年には山で採るのと同じ極太のぜんまいが出てきました。しかし、二年目から四年目までは番線のようなぜんまいが出るばかり。ところが、五年目以降はそれまでとは一変して一年目の様な立派なぜんまいが毎年出るようになってきました。

長い経験を持つ恒雄さんは、つぎのように分析します。「一年目に極太のぜんまいが出たのは、大きなカブツに山でしっかりと蓄えられた養分があるからだ。しかし、二年目から四年目は貯えられた養分が少なくなり、自力で畑から養分を吸い上げようとするが、根が十分に成長できていないのとぜんまいが畑の環境に十分馴染（なじ）めていないために貧弱なぜんまいしか出ない。一方、五年目以降になると、根がしっかり畑に広がり、平地の環境にも順応してくるので、多くの養分を吸収し極太のぜんまいを生み出すことができるのではないか」。

ぜんまいのカブツを山から採取するのはなかなか骨の折れる作業です。恒雄さん夫婦の場合、恒雄さんがぜんまいのカブツを採り、妻のトキエさんがそれを背負う。山の斜面に這（は）いつくばるような姿勢のまま、唐鍬（とうくわ）を振り下ろして大きなカブツを岩から切り剥（は）がす。カブツは重く、一度に二つ背負い降ろすのがやっとだったとトキエさんは言います。

ぜんまいを移植する畑は、第一に水はけがよいこと、次に日当たりがほどほどによい所ならどこでもよい。畑では四尺間隔に畝を切り、そこにカブツを並べて植える。恒雄さんは、一反歩に約四〇〇から五〇〇のカブツを植えた。

現在（二〇一八年）では二反歩のぜんまい畑を管理するまでになっています。畑のぜんまいの中には、今年で四〇年になる（昭和五〇年頃移植）ものもあります。しかし、今もしっかり太いぜんまいが出てきます。ただし、畑のぜんまいを収穫するときは一株当たり必ず二、三本残して採らなければなりません。つまり、ヤシナイドリ（養採り）には山以上に気を配らねばならないといいます。恒雄さんの畑のぜんまいは村人の関心を呼び、中には本気でぜんまいのカブツを山から畑に移植する人が幾人も出てきました。そして、昭和六〇年代から平成の初めにかけて多くのぜんまい畑が入叶津の至る所に出現しました。

当時、ぜんまい栽培を始めた人の多くは、昭和一〇年前後の生れの人ばかりでした。今では、その多くが亡くなってしまい、後継者のいない畑が多くなっています。収穫する人もいない畑に毎春ぜんまいは顔を出します。中には極太ぜんまいもみられます。しかし、放置されたその畑を借りてぜんまいを採るという人は、ほとんど見当たりません。村の人にその理由を尋ねると、「今は昔のように大量にぜんまいを作ってもそれらをすべて買い上げてくれる仲買人がいない。知人が毎年少しずつ買い求めてくれる程度だ。また、他人の畑を借りたら、放置しておくことも世間体（せけんてい）上できない。したがって、除草作業もしなければならない。肥やしも入れなければならない。そうした手間と資金の負担はむずかしい」といいます。今年も誰に採られることもない畑のぜんまいが初夏の風に揺れていました。

▲ぜんまいのカブツを掘り取る（イラスト・筆者）